

第二章 生産要素としての労働

一

人の役に立つ品物を作り上げるまでの労働は、品物そのものに直接かわる仕事と、その後の工程を進めやすくし、場合によってはそれを可能にするうえで欠かせない前段の仕事に分けて考えられる。パン作りでいえば、パン職人はパンそのものに直接かわるが、粉屋は小麦粉を作ること、パンができるまでに必要な労働全体の一部を担っており、種まきや収穫の仕事も同じ位置づけにある。穀物と小麦粉とパンは、同じものの姿が三段階に変わったただけなのだから、これらをすべて直接の労働と呼ぶべきだ、という考え方も成り立つ。けれども、呼び分けはさておいても、種まきのために土地を耕して整えた人は、穀物がどの段階にあってもそれ自体には触れておらず、鋤を作った職人の関与はさらに間接的である。それでも結局、彼らはみなパン、あるいはパンの価格を通じて報酬を受け取っており、鋤職人も他の者と同じである。鋤は耕す以外に使い道が

ないため、鋤が作られて使われるのは、鋤によって収穫が増え、その増収分で職人の賃金を支払える見込みがある場合に限られる。生産物が最終的にパンとして使われ、消費される以上、対価はパンから支払われなければならない。さらにパンは、これらの労働者だけでなく、農場の建物を建てた大工やれんが職人、作物を守る柵や溝を整えた職人、鋤やその他の道具の材料になる鉄を掘り出し、精錬した鋳夫や製錬工など、多くの人の報酬もまかなわなければならない。ただし、こうした人々や鋤職人の報酬は、一回の収穫でできたパンだけに頼るのではなく、建物や柵や鋤が摩耗して使えなくなるまでに続く複数回の収穫から作られるパンに支えられている。これに加えて、産地から使う場所まで運ぶ輸送の労働も欠かせない。穀物を市場へ運び、それを市場から粉屋へ運び、小麦粉を粉屋からパン職人へ運び、パンを最終の消費地へ届ける仕事である。輸送の負担はときに大きく、小麦粉が大西洋を越えてイングランドに運ばれ、穀物がロシア内陸から運ばれることもある。御者や船乗りといった運搬の担い手に加え、船など高価な輸送手段も必要で、その建造にも多くの労働が投じられるが、その建造に投じられた労働の報酬がすべてパンに依存するわけではない。船は通常、存続期間を通じてさまざまな商品運ぶからである。

特定の商品がどれほどの労働の産物であるかを見積もるのは決して簡単な作業ではない。計算に入れるべき項目が非常に多く、ある人には無限にあるようにさえ思われる。

というのも、たとえばパンを作る労働の一部として、すきを作った鍛冶屋の労働を数えるのなら、では（と問いたくなるが）鍛冶屋が使った道具を作る労働や、その道具を作るための道具を作る労働も数えるべきで、どこまでも起源までさかのぼるべきではないか、という疑問が生じるからである。けれども、この上り坂を一段、二段とたどっただけで、計算にのせるにはあまりに細かな割合の領域に入ってしまう。たとえば、同じすきが摩耗して使えなくなるまでに一二年もつとしよう。すきを作る労働の一二分の一だけを、各年の収穫の勘定に入れればよい。すきを作る労働の一二分の一は、無視できない量である。ところが、同じ道具一式で、すき職人が一〇〇本のすきを鍛造するのに足り、その一〇〇本が存続する一二年間に、それぞれ別の一〇〇の農場の土を耕すとすれば、道具を作る労働の一、二〇〇分の一が、ある一つの農場の一年分の収穫を得るために費やされた量に相当することになる。そしてこの割合が、さらに穀物の袋やパン一個一個に配分される段階に至ると、実務上、その商品に関してどんな目的であれ勘定に入れるに値しない量だとすぐにわかる。道具職人が働かなければ穀物もパンも生産されない

かったのは確かだが、だからといって、それを理由に穀物やパンが一〇分の一ファージングでも高く売れるわけではない。

二

労働が物の生産に間接的に役立つ形として見落とせないのは、生産に取り組む労働者が作業を続けられるように、食料などの生活手段をあらかじめ生み出すために、労働が先に振り向けられる場合である。この先行する労働は、ごく小規模な生産を除けば、ほとんどすべての生産にとって欠かせない条件となる。狩猟や漁労のように成果がすぐに得られる仕事は例外で、一般に生産は成果が出るまで一定の時間を要し、その間も継続して進めなければならない。したがって、労働者が仕事に取りかかる前に食料の蓄えを持つか、または他人の備蓄を必要だけ利用できて、生産が完了するまでの暮らしを支えられなければ、日々の糧を得る営みと両立できる範囲の仕事しか引き受けられない。しかも、食料を豊富に得ること自体も容易ではなく、食料を多く得るための方法は、いずれもすでに食料の蓄えがあることを前提としている。農業は、食料が得られるまで数

か月を要し、その間の作業が絶えず続くとは限らないとしても、相当の時間を占めるため、事前の食料がなければ成り立たないだけでなく、一定規模の共同体が農業だけで自らを支えるには、前もってきわめて多量の食料が必要となる。イングランドやフランスのような国が今年の農業を営めるのは、過去年の収穫が国内またはどこか別の場所で、次の収穫まで農業人口を支えるに足る食料として蓄えられているからであり、さらに、前回の収穫後に蓄えられた食料が農業労働者だけでなく、ほかの多くの勤勉な人びとを養うのにも十分であるからこそ、食料以外のさまざまな物の生産も可能になっている。

現在の生産活動は、過去に積み重ねられた労働の蓄積に支えられており、とりわけ生活必需品を備えるための労働は大きな役割を担っているが、食料を生み出す過去の労働には、ほかの種類の過去の準備労働とは異なる点がある。製粉に携わる人、刈り取りをする人、耕作する人、すきや荷車を作る人、運ぶ人、船員、造船に関わる人まで、彼らの報酬は最終産物であるパン、すなわち自分が扱った穀物、または自分の道具が関わった穀物から作られるパンによって成り立っている。ところが、そうした労働者を日々養う食料を生産した労働も、現在の収穫から生まれるパンに欠かせないにもかかわらず、ほかの労働と同じようにパンから報酬を受け取るわけではない。食料生産の労働は、そ

の時点で食料という形ですでに報酬を受け取っているからである。そもそも産物を得るには、労働に加えて道具と材料、そして労働者を養う食料が必要だが、道具と材料は産物を得る以外にはほとんど用途がなく、それらを作った労働は産物が完成してはじめて報酬を回収できる。一方、食料はそれ自体に価値があり、人を養うという直接の用途があるため、食料を作り食料で報われた労働は、その後の労働が生む産物から重ねて報酬を受け取る必要がない。同じ労働者たちが製造をしながら自給の食料も育てるなら、食料と製造品の両方が労苦の報酬になるが、さらに材料の生産や道具作りまで担う場合、追加の労苦の報酬は製造品に限られる。

労働者を養えるだけの食料の保有に基づく報酬を求める権利は、労働の対価ではなく、節制への報いだといえる。食料の蓄えがあれば、自分が働かずに食べることもできるし、他人に与えて身の回りの世話をさせたり、戦わせたり、歌や踊りをさせたりもできる。ところが、その食料をそうした用途に使わず、生産的に働く労働者に与えて、働いている間の生活を支えた場合、持ち主はその産出物から報酬を受け取るべきだと考え、通常はそのように求める。持ち主は単なる返済だけでは満足しない。元本が戻るだけでは、貯蓄を自分の利益や楽しみに回すことを先送りした見返りが得られないからである。そ

のため、前貸した食料が増えて返ってくることに、つまり商業でいう利益を期待する。

この利益への期待は、消費を切り詰めて蓄えを作る動機の一部であることが多く、少なくとも蓄えた後に安楽や満足のために使うことを控える理由にもなる。道具や材料を作る職工を支える食料についても、誰かが事前に用意し、その人が最終的な生産物から利益を得る必要がある点は同じだが、この場合は最終生産物が利益だけでなく労働の報酬も賄わなければならない。鋤の製作者は収穫まで代金を待つのが一般的ではなく、農夫が代金を前払いして鋤の所有者となり、事実上その立場を引き受けるが、その支払いの原資は結局のところ収穫にある。農夫は、収穫によって支出を回収でき、さらにこの新たな前貸し分についても利益が得られる見込みがなければ支出しないため、収穫は、農場労働者の報酬とその前貸しに対する利益に加えて、鋤職人が雇う労働者の報酬と鋤職人の利益、さらにその両方に対する農夫の利益まで賄えるだけの余りを生み出さなければならない。

以上の考察から、ほかの生産的労働を間接的に、または遠回りの形で支える産業を挙げて分類する場合であっても、生産的労働者が消費する食料などの生活を維持するための物資や、そのほかの生活必需品をつくる労働は、対象に含める必要はないことが分かる。これらの労働の主な目的は生活の維持そのものであり、それを蓄えておけば別の仕事ができるようになるとしても、それは副次的な結果、または二次的な影響にとどまるからである。これらを除くと、労働が生産に間接的に役立つ形は五つに整理できる。

第一の類型は、のちに工業で用いられる材料を得るための労働であり、多くの場合、資源を取り出す作業にとどまるため、デュノワイエのいう「採取産業」に当たる。鉱夫の仕事为例にすると、地中から、工業によって人の役に立つさまざまな製品へと変えられる物質を掘り出すことが中心である。ただし採取産業は、材料の採掘だけに限られない。石炭は工業の工程で使われる一方、人間を直接温める目的にも使われ、その場合は生産材料ではなく石炭そのものが最終産物となる。貴石鉱山の場合も同様で、貴石が生産技術に用いられるのは、ダイヤモンドによるガラス切りやエメリやコランダムによる

研磨といった一部の例に限られ、主な用途は装飾であり、これは直接の使用である。しかし実際には、使用前に加工が必要となることも多く、その点では材料とみなす余地もある。金属鉱石は、いずれも材料にすぎない。

「原材料の生産」という項目には、建築用材として樹木を伐採して材木を整えたり、建具職人その他の諸技芸のための木材を用意したりする木こりの仕事も含めなければならない。アメリカ、ノルウェー、ドイツ、ピレネー山脈、アルプスの森林では、自然に育った樹木を対象に、この種の労働が大規模に用いられている。ほかの場合には、木こりの労働に加えて、植え付けや栽培に携わる人びとの労働も加えなければならない。

同じ区分には、亜麻や麻、綿花を育てる農作業だけでなく、蚕の飼育、家畜の飼料となる作物の栽培、樹皮や染料の原料、油料植物の生産なども含まれる。さらに、ほかの産業で必要とされることで価値をもつ多くの品目を生み出す労働も、この区分に入る。

狩猟も、目的が毛皮や羽毛の確保であるかぎり同じ区分に当たり、羊飼いや畜産の仕事も、羊毛や皮革、角、剛毛、馬毛などを得る部分は同じ区分に属する。製造の各工程で材料として使われる品目は多岐にわたり、動物界、植物界、鉱物界のほぼ全域から集められている。加えて、ある産業の完成品が別の産業の材料になる例も少なくない。紡績

でつくられる糸の多くは織物の材料として使われ、織物も主として衣服や家具の製造者の材料となるほか、帆職人のように生産用の器具をつくる部門にも回る。なめし職人や革加工職人は、原材料をいわば加工済みの材料へと変えること自体が仕事の中心である。厳密に言えば、農業の手を離れたほとんどすべての食料は、パン職人や料理人にとっては材料にすぎない。

四

間接労働の第二の種類は、労働を補助する道具や器具を作る仕事である。ここでの道具や器具は最も広い意味で用い、火打ち石と火打ち金のような簡単なものから蒸気船、さらには製造機械の最も複雑な装置に至るまで、生産を支える恒久的な器具や補助物を含める。もっとも、道具と材料の境界はどこに引くべきかためらわれることがあり、燃料のように生産に用いられていても日常語ではどちらとも呼びにくいものもあるが、一般的な言い回しは科学的な説明の必要とは異なる事情によって形づくられてきた。そこで政治経済学では、科学的に重要でない差異に依拠して分類や名称を増やさないために、

直接の生産手段（直接でない手段については後に扱う）を、道具か材料のどちらかにまとめて分類するのが通例である。境界はふつう、一度の使用で、少なくとも当面の目的に関する限り道具としては失われるものを材料とみなすことで、最も一般的かつ便利に引かれる。たとえば燃料は、一度燃やせば燃料としては二度と使えず、再び燃料として使えるのは最初に燃え残った部分だけである。しかも燃料は、消費されずには使えず、また消費されてこそ有用である。というのも、燃料が少しも失われなければ熱は生じないからである。羊毛の束も、糸にすれば束としては失われ、糸も布にすれば糸としては使えない。これに対して斧は、木を切っても斧としては失われず、その後も一〇〇本、あるいは一、〇〇〇本の伐採に使えるうえ、使用のたびにわずかに摩擦するとはいえず、石炭や羊毛が破壊されることによって役目を果たすのとは違い、摩擦によって仕事をするのではない。むしろ摩擦に耐えるほど良い道具である。材料の中にも第二回、第三回と材料として用い直せるものはあるが、それは最初に寄与した製品が存続している間ではない。たとえばタンクや配管になった鉄は溶かして鋤や蒸気機関に作り替えられ、家を建てた石も取り壊した後に別の家に使えるが、元の製品が残っている間は材料としての機能が中断され、最初の使用が尽きるまで再び材料として働けない。これに対して

道具に分類されるものは、すでに行った仕事の成果が損なわれずに存続している間でも新たな仕事に繰り返し使え、時には非常に長い期間を経て摩耗して使えなくなるまで用いられる。そしてその成果が失われるとしても、それは成果自体の性質やそれ自体に起こる偶発的事情による。

原材料と道具を区別しても、実務上重要な違いはそれほど多くないが、見逃せない点の一つある。原材料は一度使えば原材料としては失われるため、その生産に要した労働の全額に加えて、資金を出した者が消費を控えて資金を供給したことへの報いも、その一度の使用で得られる成果からまとめて支払う必要がある。これに対して道具は繰り返し使えるので、道具が関わって生まれる産出物の総量が、道具の製作に投じられた労働と、それを支えた資金提供への報いを賄う基金となる。そのため、個々の産出物が負担するのはその一部で足り、通常はごく小さな割合でよく、道具の代金をいったん立て替えた直接の生産者が、道具の生産者に支払った分を回収できる程度でよい。

五

第三に、産業は材料や道具をそろえるだけではなく、自然災害による損壊や人による暴力、略奪によって操業が妨げられたり産物が損なわれたりしないよう、あらかじめ備えておく必要がある。これにより、産物そのものには直接関わらないものの、生産を支える労働として、産業を保護するための労働が生まれる。工場や倉庫、埠頭、穀倉、納屋、家畜用施設、農作業のための農業施設など、生産目的の建物はそのためのものである。ただし、労働者が住む建物や彼らの個人的な便宜のための建物は、食料と同じく生活上の需要を満たすものであり、労働の報酬に含めるべきなので、ここには含めない。保護の労働には、牧夫が家畜を危害から守る仕事や、生け垣や溝、壁、堤防をつくる仕事のように、より直接的な形もある。さらに、兵士、警察官、裁判官の働きも欠かせない。彼らは産業の保護だけに従事するわけではなく、その報酬も、個々の生産者にとって直ちに生産費の一部となるわけではない。だが、その報酬は税として産業の産物から賄われ、統治が行き届いた国では、費用をはるかに上回る効果を産業にもたらす。社会全体で見れば彼らも生産費の一部であり、ほかの必要な労働者に加えて彼らを

維持できる収益が得られないなら、その形と方法では生産は成り立たない。政府の保護がなければ、生産者は時間と労力の多くを防衛に振り向けるか、武装した者を雇うしかなく、その追加の労働費を産物から直接支払えないものは生産されなくなる。現行制度では、産物が一定の負担を分かち合い、政府支出に無駄があるとしても、より少ない費用で、よりよい保護を受けている。

六

第四に、労働のかなりの部分は生産物を作る工程だけに向けられているのではなく、でき上がった品を想定される利用者が手に取れる状態に整え、必要とする人のもとへ届ける段階にも多く費やされている。こうした役割だけで生計を立てる人々も多く、陸路や水路の運送に従事するラバ使い、荷馬車の御者、荷車の運転手、はしけの船頭や船員、港や埠頭の作業員、石炭の積み下ろし作業員、荷運びの仕事に就く人、鉄道事業に携わる人などがこれに当たる。さらに、輸送を可能にする道具や設備を作る仕事もあり、船やはしけ、荷車、機関車の製造に加えて、道路や運河、鉄道の建設や整備も含まれる。

道路が政府によって建設され、無料で一般に開放される場合があつても、建設にかかる労賃や資材費などの費用が生産の成果から賄われるという仕組みは変わらない。道路建設のために一般に課される税を負担することで、生産者は自分の利便にかなう道路の利用に対して応分の負担をしているともいえ、それがまずまず適切な判断で作られるなら、その道路は負担額を大きく上回る形で生産や産業の収益を押し上げる。

生産された品を本来の消費者が入手できるようにし、すぐに使える状態に整える労働者として、商人や取引業者、ディーラー、トレーダーなど、分配や流通を担う人々がいる。これも多くの労働者を抱える大きな分野である。もし消費者が欲しい品を、生産者とそのつど直接交渉してしか入手できないとすれば、時間と手間の無駄が大きく、場合によっては不便すぎて成り立たないことさえある。生産者と消費者は広く分散しており、消費者が生産地から遠いことも多いからである。こうした時間と労働の損失を減らすために、早い時期から市や市場が設けられ、仲介者なしに両者が定期的に会える仕組みが用いられてきた。この方式は多くの品目で一定の効果があり、とくに農産物では比較的上まぐ機能するが、それは農業者が季節によってある程度の余暇を確保しやすいからである。しかしこの場合でも、買い手が別の仕事を持ち、近くに住んでいないと、市場へ

出向くこと自体が煩わしく不便になりやすい。さらに、生産に継続的な注意を要する品目では、定期市の開催間隔をかなり空けざるをえず、消費者はかなり前から備えるか、長いあいだ需要を満たせない状態に置かれやすい。社会が店舗を設ける余力を持つより前には、こうした需要の充足は広く行商人の手に委ねられ、年に一回か二回しか開かない市よりも、月に一回ほど現れる行商人のほうが好まれてきた。町や大きな村から離れた農村部では、行商の役割はいまも完全には置き換わっていない。一方、一定の場所に住み、固定客を持つ商人はそれだけ信頼されやすく、利用しやすい場所に店があれば消費者はそちらを選ぶ。したがって商人は、近隣に十分な消費者がいて収益が見込める地域ごとに拠点を置き、店を構えて定着するほうが有利になる。

多くの場合、生産者と販売業者は同一人物であり、少なくとも資金の所有と業務の統括という点では役割が重なっている。仕立屋や靴屋、パン屋などの職人は、製造の最終段階に限れば、自分が売る品を自分で作る生産者でもある。ただし、製造と小売を一体で担うのが合理的なのは、小売に便利な場所、またはその近くで有利に生産でき、しかも少量ずつ作って少量ずつ売れる場合に限られる。品物を遠方から運ぶ必要があると、一人で製造と小売の双方を十分に監督するのは難しい。品質と価格の両面で、大量生産

が最も有利な品では、一つの工場が供給をさばくには多くの地域の販路が必要となり、小売は別の担い手に任せたほうが都合がよい。さらに靴や上着でも、連隊や救貧施設に一度に大量に納入する場合は、通常、生産者から直接買うのではなく、どの生産者から良品を安く調達できるかを調べることを業とする仲介業者を通じて入手する。最終的に小売で売られる品であっても、取引の便宜から、やがて卸売業者という層が生まれる。

製品と取引が一定の規模を超え、工場が多数の店に供給し、店が多くの工場から仕入れるようになる、製造業者と小売業者が直接やり取りすることによる時間と手間の損失が双方で大きくなり、買って売り直す大口の商人など、少数の相手と取引するほうが便利になる。卸売業者が生産者から商品を集めて小売業者に配分し、小売業者が消費者に行き渡らせる。こうした役割を担うのが「分配階級」であり、「生産階級」を補完する存在である。そして、分配された生産物、またはその代金が、分配に要する労力への報酬の源であると同時に、分配に必要な資金を前払いできるよう消費を控えたことへの対価でもある。

七

外部の自然に向けた労働が生産に役立つ形についてはこれまで述べてきたが、生産に資する労働にはもう一つ別の形があり、結びつきはより間接的であるが効果は同様で、人間を対象とする労働である。誰もが乳幼児期から、特定の一人、または複数の人が担う多くの手間によって育てられ、もしその労働がまったく、あるいは一部でも注がれなければ、子どもは将来自ら労働者となるだけの年齢や体力に達しなかったはずである。

社会全体から見れば、乳幼児を育てるための労働と費用は生産の前提となる支出の一部であり、将来その子どもたちの労働の生産物によって、増加して回収される性格を持つが、個人の立場では、こうした負担は最終的な見返りだけを動機として行われるのが一般的ではなく、政治経済学の多くの目的において生産費としてとくに数える必要は小さい。これに対して、社会における技術教育、すなわち生産技術を学び教え、技能を身につけて習得し、他者へ伝えるための労働は、通常、より多く、より価値の高い生産物を得ることを目的として行われるため、学ぶ者は、教師を雇う場合にはその労働に十分な報酬を支払ったうえで、将来みずからが同等かそれ以上の報酬を得られるという見込み

のもと、時間と労力を投じて学習に取り組むのである。

手仕事であれ頭脳労働であれ、生産力を付与する労働は、社会が生産活動を遂行するために必要な労働、言い換えれば生産物が社会にとって要するコストの一部とみなせるが、同様に、事故や病気によって生産力が失われたり弱まったりするのを防ぎ、生産力を維持するための労働も、社会全体にとっては生産コストの一部として位置づけられる。産業に従事する人々が医師や外科医の治療を受けるとき、その医療の労働は、働き手の生命や心身の能力という生産資源が、死亡や障害によって失われるのを防ぐために社会が負担する犠牲、すなわちコストとみなせる一方で、この点は本人にとっては受診の動機の一部にすぎず、ときにはほとんど意識されないこともある。四肢を切断したり、熱病を治そうとしたりするのは、主として経済的理由からではないが、それでも経済面だけを見ても、一般にそれだけで十分な動機がある。したがって、これらの労働と支出は、生産に資するものでありながら、その目的のため、あるいはそこから生じる利益のために行われるのではないため、生産的労働について政治経済学が述べる多くの一般命題の適用範囲の外にあるが、社会の側から見れば生産活動を進めるための前払いの一部であり、その補償は生産物によってなされる。

八

労働には、一般に精神労働に分類されるものの一種として、手作業そのもののほど即座ではないが、同じように、ただしより間接的に最終的な産出につながる仕事がある。たとえば、工業の製法や工程を発明する人びとの労働である。もっとも、精神労働という呼び方は便宜的なもので、実際にはそれだけに限られない。人の働きには常に精神的要素と身体的要素とが入り交じっている。たとえば、最も愚鈍な土工や運搬人が来る日も来る日もはしごを上るという機械的な動作を繰り返しているだけに見えても、その働きには一部知的な要素が含まれており、実際、最も賢い犬や象でもおそらく同じようには教え込めないだろう。どれほど鈍い人でも前もって教えれば粉ひきを回すことはできるが、馬に同じことをさせるには、だれかが追い立て、見張らなければならない。他方で、最も純粹に精神的に見える労働であっても、外に何らかの結果を生む以上、そこには身体的な要素が含まれる。ニュートンが『プリンキピア』を生み出すには、筆記や口述といった身体の働きが不可欠であり、構想を頭の中で練っているあいだにも、多くの図を描き、多くの計算や証明を書きつけていたに違いない。発明家もまた、頭脳の労働に加

えて、構想が実際の行為として成功裏に実現するまで、模型を作り、実験を重ねるなど、手の労働を多く行うのが普通である。精神であれ身体であれ、こうした働きは、生産が成し遂げられるための労働の一部に当たる。ワットが蒸気機関を考案した労働は、それを製作する機械工や、それを運転する技師の労働と同じく、生産に欠かせない一部分であり、彼らと同様に、産出から報酬を得る見込みのもとで行われた。発明の労働は実行の労働とまったく同じ基準で見積もられ、支払われることも少なくない。装飾品の製造業者の多くは模様を考案する者を雇い、模様を写し取る者と同様に、賃金や俸給を支払っている。これらは厳密に生産労働の一部であり、書物においても、著者の労働は印刷や製本の労働と同じように、その本の生産の一部である。

国民全体の視点、つまり普遍的な立場から見れば、学者や理論家、思索家の労働も、実用的な技術を生み出す発明家の労働と同じように、狭い意味での生産の一部だと言える。実際、理論上の発見を直接のきっかけとして生まれた発明は少なくなく、自然の力についての知識が広がるたびに、外的な生活の目的に合った応用が生み出されてきた。電磁電信は、エルステッドの実験とアンペールの数学的研究から生まれた、驚くべき、きわめて意外な結果である。近代の航海術も、アレクサンドリアの数学者が、平面と円

錐が交わって生じる三つの曲線の性質を、純粹に理論的で、見かけ上は單なる好奇心にもとづく探究として調べたことから、思いがけず發展した。生産や物質の面だけから見ても、思考そのものの重要性に限りを設けることはできない。ただし、こうした物質的な成果は、たとえ結果として生まれるにせよ、学者の探究の直接の目的となることはまれであり、また、発見が長い時間を経て、しかも偶然に増産をもたらすことがあつても、その増産による利益から研究者に直接報酬が支払われるのは一般的ではないため、政治経済学の多くの議論では、この最終的な影響を考慮する必要はあまりない。その結果、学者はふつう、書物など、自分から直接生み出される有用物や販売可能な品の生産者としてのみ分類されがちである。しかし、政治経済学が常にそうする用意をしておくべきように、個々の行為やそれを決定する動機ではなく、国民的で普遍的な結果に目を向けるなら、知的な思索は社会の生産的労働の中でも影響力の大きい部分であり、それを続け、またそれに報いるために用いられる社会の資源の部分も、支出の中で非常に生産的な部分だと見なされなければならない。

九

これまで生産を進めるうえで労働をどう用いるかを見てきたが、産業を農業、製造業、商業に分ける一般的な区分は、ほとんど用いてこなかった。正直に言えば、この三分法は分類として十分に役立っていないからである。狩猟や漁業はもちろん、鉱山で働く人、道路を造る人、船員など、生産の広い分野にはこの枠に収まりにくい仕事が少ない。さらに、農業と製造業の境目も正確には引けない。たとえば製粉業者やパン職人は、農業者に数えるべきか、それとも製造業者に数えるべきか。彼らの仕事の性質は製造に近く、彼らに引き渡される前に食料はすでに土から離れているが、同じことは脱穀や風選、バターやチーズづくりにも同様に言える。これらが常に農業に数えられてきたのは、農場に住む人が耕作と同じ監督の下で行うのが慣習だからだろう。しかし多くの目的においては、製粉業者やパン職人も含め、これらの人々は耕す人や刈り取る人と同じ階層に置かなければならない。いずれも食料の生産に関わり、報酬は生産された食料に左右され、一方が栄えれば他方も栄えるからである。彼らはまとめて「農業利害」を形づくり、その結合した労働によって社会に提供する役務も一つで、報酬も一つの共通の源泉から

支払われる。一方、土を耕す人であっても、生産物が食料ではなく、一般に製造品と呼ばれるものの原料である場合、社会経済上は多くの点で製造業者側と同じ区分に属する。カロライナの綿花栽培者やオーストラリアの羊毛生産者は、穀物生産者よりも、紡績や織布に携わる人々と利害の共通点が大きい。ただし、土に直接働きかける産業には、後で述べるように重要な結果を左右する固有の性質があり、同じ人が担うかどうかにかかわらず、その後続の生産段階すべてとは区別して考えるべきである。この点は、脱穀や風選のように耕作と同じ担い手が受け持つ場合があるのと同じように、綿花の栽培と綿糸の紡績のように別の担い手が受け持つ場合についても当てはまる。したがって、ここで農業労働と言うときは、特に反対の趣旨が本文で明示または示唆されない限り、土に直接働きかける労働だけを指す。なお、製造業という語は厳密さが求められる場面では意味が広すぎてあまり役に立たないので、私がこれを用いるときは、科学的というより通俗的な意味で用いるつもりである。